



生徒授業協議会の様子

「自立した学習者」を育むために ～生徒がつくる授業「みがく」の実践～ 豊川市立御津中学校

本誌巻頭では対話型の教育について、平田オリザ先生にその在り方をご示唆いただきました。大きな転換期を迎える私たちの生活や社会に柔軟に対応できる子どもたちを育もうと、学校現場ではさまざまな試みが続けられています。本レポートでは、愛知県豊川市立御津中学校が取り組む、生徒を主体とした授業実践「みがく」を紹介するとともに、実践にかける思いを語ってくださった元音楽科教員で校長の峯村邦泰先生のインタビューをお届けします。

生徒がつくる授業「みがく」とは、みずから学習、みんなで学習を目標とした、御津中学校の学習スタイルです。愛知県では、「主体的・対話的で深い学び」からの授業改善に取り組むために、「自立した学習者」を育てる教育活動への転換を進めており、その中で御津中学校では、「自主 友愛 勤労」の校訓のもと、知・徳・体の調和のとれた人間形成を図るために、この「自立した学習者」を目指した授業を展開しています。今回は、3年3組の音楽科における「みがく」の授業を取材しました。

「生徒がつくる」合唱の授業

本時は、合唱コンクールに向けた『タイムリーパー』(作



『タイムリーパー』を合唱する3年3組の生徒

詞：覚 和歌子／作曲：三宅悠太)の歌唱練習です。進行やタイムキーパーを含め、授業の始めから終わりまで



教師役の教科リーダーが授業の流れを説明する



パートごとに分かれて、歌いながら気づいたことを互いに伝え合う



各パートの発表を聴いて、感じたことを共有する



気になる箇所を取り出し何度も歌い試す

生徒自身で授業を検証する

全て生徒のみで展開されます。事前に、教科リーダーと呼ばれる教師役の生徒3人が、前時までの学習内容をもとに本時の授業の流れを考え、先生と打ち合わせを行ったうえで実施されます。

生徒が考えた本時のめあては、「音程と入りのタイミングを100%そろえよう」。パート練習を中心に、それぞれの課題を見つけ、解決方法を探り、学級全体で共有し振り返るまでの流れが組まれています。授業の始めには、教科リーダーから「自分との違いに気づく」「ブレス」など、めあてにせまるためのキーワードが提示され練習がスタート。パート練習の内容や方法も全て生徒に委ねられており、各パートリーダーを中心に工夫しながら練習を進めていきます。同じ部分を何度も繰り返し歌って改善すべき箇所を探したり、互いの声を聴き合いながらメンバー全員で意見を出し合ったりする姿が見られるなど、およそ20分間で充実した練習が行われました。そして、授業の後半では、パートごとの発表を聴き合い、練習で意識したポイントが音楽から伝わったか、練習前との変化が感じられたかを学級全体で共有します。最後は全員で歌い、個人やグループ間で本時を振り返り、授業はまとめられました。

授業後には全校が体育館に集まり、それぞれの学級ごとに生徒授業協議会が開催されました。本会は、生徒が自ら行った授業を生徒自身で検証することで、授業改善に向けた課題を明らかにすることを目的としています。「授業みがきカード」と呼ばれる授業改善の視点が書かれたチェックシートと照らし合わせながら自らを評価した後、話し合いの中から出された学級全体としての評価を全校で共有し、会は締めくられました。

授業や協議会では、生徒たちが課題解決に向けて、さまざまな意見をもち寄り対話する姿が印象に残っています。また、驚くべきことに、50分の授業の間、教師は生徒からの疑問に少しヒントを与えたのみで一度も進行に関わっていません。授業を見届けた音楽科の平山理恵先生は、「授業がうまく回るかと不安だったが、生徒たちで課題を立て、話し合いながら授業をやり切った姿に感動した」と振り返ります。こうした取り組みが、多様に変化する社会を力強く生きる子どもたちの糧となることを期待します。

(ヴァン編集部)

INTERVIEW インタビュー

全校で取り組む「みがく」

——「みがく」を始められた背景について教えてください。

峯村：本校の「みがく」は、主体的・対話的で深い学びを具現化したもので、子どもたちの主体性が議論されて久しいですが、今も言われ続けているのは、まだ「そうなっていない」から、そして「時代が欲している」からだと思います。「予測困難な未来をどう子どもたちが生き抜くか」、「AIが普及する中で人間の強みとは何か」、「少子化や多様性にどう向き合うか」——。パラダイムシフトの真っただ中で、「主体的」という言葉の本質を問い合わせるうちに、これまでの教師主導の授業を改めるべきだと考え、生徒が自ら授業を組み立てられるような「自立した学習者」を育むための研究がスタートしました。

——本日の授業では、積極的に話し合いながらパート練習に取り組む生徒の姿が印象的でした。

峯村：昨年までは全く違ったんです。この1年での変化の要因は、全校、全教科で「みがく」に取り組んだことだと思います。学びのプロセスを統一させ、対話的な言葉が自然とれるようになるまで積み重ねてきました。今までできなかった言葉のキャッチボールができるようになり、今度はその質や当たり前のラインが徐々に上がってきてています。現在も話し合いがより深まる方法や、ホワイトボードなどの活用方法の検証を全校で続けているところです。

——「みがく」では、本時のように生徒の進行による授業が特徴的ですが、どのような位置付けでしょうか？

峯村：「みがく」には3つの段階があります。レベル1は簡単に言えば、教師主導の授業で、例えば、初めてアルトリコーダーの使い方を学ぶときなど、教師が教える



生徒が戸惑ったところをアドバイスする平山理恵先生

べき内容に重点が置かれた授業を指します。次のレベル2は、生徒に半分以上委ねた授業です。教師は本時の取り組みを伝え、あとは生徒に任せて、ときおり対話のヒントを授ける形です。そしてレベル3が、生徒の進行による授業です。教師は教科リーダーとの事前打ち合わせで授業の組み立て方をアドバイスするのみで、授業中は終始支援に回り、ほぼ出番はありません。単元の中で、基本的に1回はレベル3を行うことにしています。

——通常のカリキュラムに含まれるのですね。評価はどのようにされていますか？

峯村：「みがく」レベル3では、生徒の意見の出し方や回数などを見取り評価します。また、評価につながる振り返りを大切にしており、個人や班ごとに行う振り返りのほか、本日ご覧いただいた協議会形式の、学級全体での振り返りも設けています。加えて、本校では、今年度から技能教科における定期考査の筆記試験を廃止しました。ですので、音楽では技能テストと授業の振り返りや鑑賞ノート、そして「みがく」レベル3における評価で成績を付けています。

——どの生徒も振り返りカードに授業で感じたことをたくさん記入していましたね。書くためのトレーニングなどされていますか？

峯村：書くことを鍛えるというよりは、振り返りを粗末にしない取り組みを行っています。自分で振り返ったり共有したりすることで次の課題が明確になりますし、その気づきをたくさん経験することで、自然と書くことへの負担を軽減できていると思います。

音楽は言葉のない対話

——「自立した学習者」を育むうえで、音楽をどのように捉えていますか？

峯村：音楽には長い歴史の中で培われてきた多数の様式や技法、価値観があり、それを限られた授業の中で扱うのですから、教師が教えるべき内容もあります。ですが、教えてばかりだと、生徒は表現する喜びを感じられず、受け身的になってしまいます。例えば歌唱なら、テンポ、ブレス、旋律の動き、リズム、歌詞など、いろいろな要素がありますが、ふだんの授業で教えるのはその中の1つか2つでよくて、積み重ねの中で生徒の学び方は変わっています。学校における音楽は、プロの演奏家を育てることが目的ではありません。生徒たちの表現を認め、音楽を通じた感動を体験させることが最も大事で、そこに全人教育、あるいは情操教育としての音楽科の役割があると考えています。その意味では「音楽教育」ではなく「音楽への教育」と言えるかもしれません。



授業後にグループで振り返り、生徒授業協議会で意見を出し合う

——「音楽への教育」として印象深い出来事はありますか？

峯村：合唱コンクールに向けた練習などは最たるものだと思います。昨年ですが、合唱コンクールの2週間前になつても自信をもって声を出せるクラスが少なく、どうしたものかと考え、授業を急遽変えて私が全クラスの指導をしました。15分程度でしたが、合わせ方やブレスのタイミングなどを教えてただでも、生徒の歌声がどんどん変わっていました。要するに、ほとんど会話はしていないけど、私の指揮する動作や目線、目力、ブレス、その一つ一つの所作で生徒に伝えられると思ったんです。対話というと、どうしても言葉を交わすものだと思うかもしれません、音楽においては言葉だけではなく、音や音楽同士でも対話になりうるのです。私が汗だくになりながら指揮する姿を見て、感じ取ったことを歌声にして応えてくれたのだと思います。

——言葉を交わさない対話が、生徒の意識を変えたのですね。

峯村：変わった校長だと思われたかもしれません、こちらの覚悟が伝わったのかもしれませんね。指導以外にも、中部フィルハーモニー交響楽団の協力を得て、私の指揮と解説で鑑賞教室などを行っており、生徒の気づきや学びにつながる取り組みをこれからも続けていきたいと思っています。

みんなの意識を変えることから

——「みがく」の導入により、授業スタイルは大きく変わったと思いますが、先生方の反応はいかがでしたか？

峯村：最初はとても苦労されたと思います。先生方に納得して実践していただくために、まずは研修を行うことから始めました。子どもの主体性を重視した授業実践を専門的に研究されている先生にご指導いただいたり、その先生が実際に実行している授業を動画で見てもらったりという機会をできる限りたくさん設けました。また、私が先生方にお願いしたのは「我慢」です。これは自身の反省も含めてですが、教師が想定した授業の流れからずれたり、質問や発問に対して意図した発言や動きでなかなかたりするときに、どうしても正してしまいたくなるのですが、それは間違っています。他の人と違うことをする、違う意見があるからこそ、そこに学びが生まれるのです。そのように我々の認識をシフトしていく必要があり、そのうえで協働的な学びを続けることが、生徒の心理的安定や自己肯定感を育み、さらに学ぼうとする意欲につながると考えています。

——教員の意識改革から始められたのですね。生徒にはどのように説明されましたか？

峯村：校長授業という形で、これまでの時代、社会ではどのような姿や能力が求められるのか、そのためにはどのような授業を目指しているかを私が説明しました。そのときも、別の学校の事例を動画で見てもらったのですが、その映像では授業協議会で中学1・2年生が、もう教師さながらに自分たちの授業について解説しているんです。まさに百聞は一見に如かずで、生徒たちの気持ちが大きく動いたという感じがしますね。

——そこから1年で今の状態にまでされたということで、これからがとても楽しみですね。

峯村：そうですね。まだ研究を始めたばかりですが、成果も感じています。生徒会役員立ち合い演説会では、多くの立候補者が授業改善を公約に掲げ、会長になった生徒は「自分の意見が言える御津中」をスローガンに掲げています。これも「自立した学習者」の表れだと思います。「みがく」は今も生徒たちの手で進化し続けています。



熱い思いを語ってくださった峯村邦泰校長先生